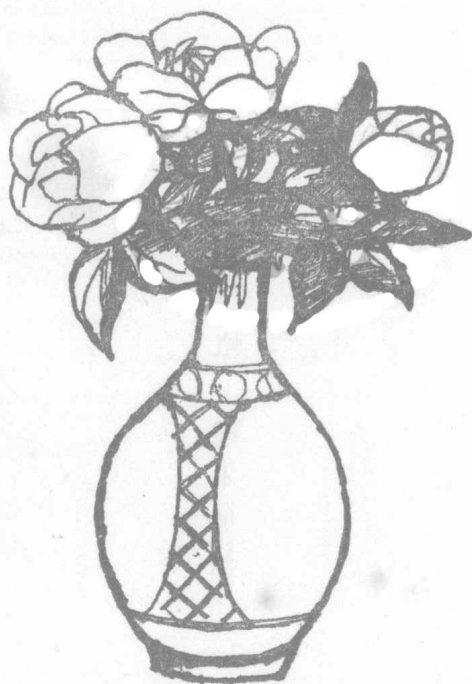


日本古典文學全集

竹取物語・伊勢物語 落窪物語

三谷榮一・大津有一
所 弘



河 出 書 房

現代語 日本古典文學全集

昭和二十九年三月十五日
昭和二十九年三月二十日

初版印刷
初版發行

竹取物語
伊勢物語
落窪物語

定價 貳百九拾圓

地方參百圓
定價

譯者代表

三谷榮一

東京都千代田區神田小川町三ノ八

發行者

河出孝雄

東京都文京區戶崎町七一

印刷者

小泉輝章



發行所 株式會社 河出書房

東京都千代田區神田小川町三ノ八

振替口座 東京一〇八〇二
電話 神田(25)三一七四

小泉印刷 文勇堂製本

目次

竹取物語

凡例	三
一 かぐや姫のおいたち	五
二 つまどい	六
三 佛の御石の鉢	一〇
四 蓬萊の玉の枝	二三
五 火鼠の裘	二七

伊勢物語

凡例	五一
第一話 初冠	五三
第二話 西の京の女	五三
第三話 ひじき藻	五四
第四話 西の對の女	五四
第五話 築土の崩れ	五四
第六話 芥川	五五
第七話 歸る浪	五六
第八話 淺間の戀	五六
第九話 八橋・うつ山・富士の山・す	五六

六 龍の首の珠	二〇
七 燕の子安貝	二三
八 御狩ののみゆき	二七
九 天の羽ごろも	三一
解説	四〇

第一〇話 みだ川	五六
第一一話 空ゆく月	五六
第一二話 武藏野	五九
第一三話 武藏鐙	五九
第一四話 栗原のあねはの松	六〇
第一五話 しのぶ山	六〇
第一六話 紀有常	六一
第一七話 あだなりと名にこそたてれ	六三
第一八話 紅に匂ふが上の白雪	六三

第一九話	天雲のよそ	三
第二〇話	楓の紅葉	三
第二一話	おのがよ	三
第二二話	秋の夜の千夜を一夜	三
第二三話	筒井筒	六
第二四話	あらたまの年の三とせ	六
第二五話	秋の野に笹分し朝の袖	六
第二六話	もろこし舟	六
第二七話	水口に我や見ゆらむ	六
第二八話	あふごかたみ	六
第二九話	花の賀	六
第三〇話	あふ事は玉の緒ばかり	七
第三一話	よしや草葉のならむさが	七
第三二話	しづのをだまき	七
第三三話	こもり江に思ふ心	七
第三四話	いへばえに	七
第三五話	玉の緒を沫緒によりて	七
第三六話	谷せばみ	七
第三七話	我ならで下紐解くな	七
第三八話	君により思ひならひぬ	七
第三九話	源の至	七
第四〇話	あかぬわかれ	七
第四一話	上のきぬ	七
第四二話	誰が通ひ路	七

第四三話	しでの田長	七
第四四話	われさへもなく	七
第四五話	飛ぶ螢雲の上まで	七
第四六話	めかるともおもほへなくに	七
第四七話	大幣	七
第四八話	人またむ里	七
第四九話	ねよげに見ゆる若草	七
第五〇話	あだくらべ	七
第五一話	前栽の菊	七
第五二話	かざり粽	七
第五三話	いかでかは鳥のなくらむ	七
第五四話	ゆきやらぬ夢路	七
第五五話	思はずはありもすらめど	七
第五六話	わが袖は草の庵	七
第五七話	われから	七
第五八話	長岡	七
第五九話	東山	七
第六〇話	花橘	七
第六一話	築川	七
第六二話	古の匂はいづら	七
第六三話	つくもがみ	七
第六四話	玉すだれ	七
第六五話	在原なりける男	七
第六六話	難波津をけさこそみつの浦	七

第六七話	生駒の山	八七
第六八話	住吉の濱	八七
第六九話	狩の使	八八
第七〇話	みるめかるかたはいづこぞ	八九
第七一話	千早振神のい垣も	八九
第七二話	大淀の松	九〇
第七三話	月の中の桂	九〇
第七四話	岩根ふみ重なる山	九〇
第七五話	みるをあふにて	九〇
第七六話	大原や小鹽の山	九一
第七七話	安祥寺	九一
第七八話	山科の禪師のみこ	九二
第七九話	わが門に千尋あるかげ	九三
第八〇話	おとろへたる家	九三
第八一話	鹽竈にいつか來にけむ	九三
第八二話	渚の院の櫻	九四
第八三話	忘れては夢かとぞ思ふ	九五
第八四話	千代もといのる人の子のため	九六
第八五話	思へども身をしわけねば	九七
第八六話	今までに忘れぬ人は	九七
第八七話	布引の瀧	九八
第八八話	おほかたは月をもめでし	九九
第八九話	人しれずわれ戀死なば	九九
第九〇話	櫻花けふこそかくも	一〇〇

第九一話	をしめども春の限の	一〇〇
第九二話	蘆べこぐ棚なし小舟	一〇〇
第九三話	おふなおふな思ひはすべし	一〇一
第九四話	秋の夜は春日わするる	一〇一
第九五話	彦星に戀はまされり	一〇二
第九六話	天のさかて	一〇二
第九七話	四十の賀	一〇三
第九八話	梅のつくり枝	一〇三
第九九話	右近の馬場のひをりの日	一〇三
第一〇〇話	わすれ草	一〇三
第一〇一話	藤の花	一〇四
第一〇二話	あてなる女の尼になりて	一〇五
第一〇三話	ねぬる夜の夢をはかなみ	一〇五
第一〇四話	賀茂の祭見	一〇五
第一〇五話	白露はけなばけなむ	一〇六
第一〇六話	たつた川のほとり	一〇六
第一〇七話	藤原の敏行	一〇六
第一〇八話	風吹けばとはに浪こす岩	一〇七
第一〇九話	花よりも人こそあだに	一〇八
第一一〇話	玉むすび	一〇八
第一一一話	下紐	一〇八
第一一二話	須磨の蜚	一〇九
第一一三話	やもめてゐて	一〇九
第一一四話	芹川行幸	一〇九

第一一五話	おきの井、都島	一一〇
第一一六話	小島の濱楸	一一〇
第一一七話	住吉行幸	一一〇
第一一八話	玉葛はふきあまた	一一一
第一一九話	かたみ	一一一
第二二〇話	筑壘の祭	一一二

落窪物語

凡例	一一九
----	-----

卷の一

一	落窪の君のおいたち	一二
二	姫の才藝	一二
三	侍女阿漕	一三
四	阿漕の夫帯刀	一三
五	左近の少將道頼	一三
六	姫孤獨の歎き	一四
七	少將の初文	一四
八	父のあわれみ	一六
九	藏人の少將の袴	一六
一〇	とだえぬ文	一七
一一	石山詣	一八
一二	帯刀の訪問	一九

第一二一話	梅壺	一二
第一二二話	井手の玉水	一二
第一二三話	深草にすみける女	一二
第一二四話	思ふ事いはでぞ	一三
第一二五話	終焉	一三
解説		一四

一三	少將の垣間見	一四
一四	姫との契り	一四
一五	後朝の文	一五
一六	阿漕の準備	一四
一七	少將再訪	一四
一八	三日の夜の設け	一五
一九	やらずの雨	一五
二〇	足白の盗人	一五
二一	三日の餅	一六
二二	石山歸り	一七
二三	鏡の箱	一八
二四	代りの箱	一六
二五	帯刀の失策	一六
二六	嵐の前の静けさ	一六
二七	藏人の少將の縫物	一六

卷の二

一六	北の方の冒言……………	一六五
一五	女房少納言の物語——四の君と左近の少將の縁談……………	一六七
一四	女房少納言の物語——辨の少將の噂話……………	一六八
一三	縫物の手つだい——北の方の驚き……………	一七〇
一二	北の方の悪だくみ……………	一七二
一一	ふたりの便り……………	一七三
一〇	北の方の讒言……………	一七五
九	姫の幽閉……………	一七四
八	三の君と阿漕……………	一七五
七	少將の悲歎と阿漕の活動……………	一七六
六	三郎君の使……………	一七八
五	北の方典藥をよぶ……………	一七九
四	少將と阿漕帶刀の苦慮……………	一八〇
一	笛の袋……………	一八二
二	典藥の心懸想……………	一八三
三	典藥の入室……………	一八三
四	典藥と焼石……………	一八四
五	帶刀・少將・典藥の文……………	一八六
六	典藥防衛策……………	一八八
七	典藥夜中の失敗……………	一八八
八	女君救出の計……………	一九〇

九	女君救出、三條邸行……………	一九〇
一〇	中納言邸の騒ぎ……………	一九一
一一	人笑われな典藥……………	一九二
一二	三郎君の正言……………	一九三
一三	二條邸にて……………	一九三
一四	少將と四の君の縁談——少將の復讐計畫……………	一九四
一五	少將とその母北の方……………	一九六
一六	兵部の少輔……………	一九六
一七	二條邸の少將夫妻……………	一九八
一八	少輔の身代り結婚……………	一九九
一九	少輔の後朝の文……………	一九九
二〇	中納言方の不審……………	二〇〇
二一	ところあらわし……………	二〇二
二二	あとの騒ぎ……………	二〇三
二三	姉妹の歎き……………	二〇四
二四	二條邸の賑わい……………	二〇四
二五	藏人の少將の縁談、三の君の歎き……………	二〇五
二六	清水詣——途中の車争い……………	二〇六
二七	清水詣——参籠場所の横取り……………	二〇八
二八	中納言夫婦の歎き……………	二一〇
二九	藏人の少將と中の君の結婚……………	二一一
三〇	昔なじみ——女房中納言……………	二一二
三一	男君の縁談……………	二二三
三二	女君の物思い……………	二二四

卷の三

一	男君の眞心……………	二五
二	女君と大將殿の北の方——祭見物……………	二九
三	女君大將邸へ……………	三〇
四	父への思慕、初産……………	三〇
五	よろこびごと……………	三一
六	中納言三條邸修理……………	三三
七	賀茂の祭見物……………	三三
八	典藥打たる……………	三三
九	歸途の歎き……………	三四
一〇	車争いをめぐる人々……………	三五
一一	三條邸への移轉計畫……………	三七
一二	昔なじみの今参り……………	三八
一三	三條邸への移轉準備……………	三九
一四	三條邸について——中納言の訴え……………	四〇
一五	三條邸について——越前の守の訴え……………	四二
一六	女君の心痛……………	四三
一七	越前の守の報告……………	四三
一八	男君一行三條邸に入る……………	四四
一九	鏡の古箱……………	四五
二〇	疑團氷解……………	四七
二一	中納言三條邸へ……………	四九
二二	父との再會……………	五一

卷の四

一	中納言父子への饗應……………	四三
二	世の浮き沈み——中納言邸の人々の述懐……………	四四
三	便りさまざま……………	四五
四	兩家の親交……………	四六
五	法華八講の支度……………	四六
六	男君一家の榮え……………	四七
七	督夫妻中納言邸へ……………	四七
八	八講の催し……………	四八
九	なまじいの便り……………	四九
一〇	中納言のよろこび……………	五一
一一	七十の賀……………	五一
一二	中納言重病……………	五二
一三	新大納言のよろこび……………	五二
一四	新大納言の遺言……………	五三
一五	新大納言死去、後のいとなみ……………	五三
一六	遺産の處分——男君と越前の守……………	五九
一七	遺産の處分——母と子等……………	六一
一八	男君一家の榮えとその恩恵……………	六三
一九	太郎次郎と祖父……………	六五
二〇	筑紫の帥……………	六七
二一	四の君の再縁談……………	六八
二二	筑紫の帥と四の君の結婚……………	七〇

三	男君と女君の懷舊談……………	二七二
三三	四の君帥邸へ……………	二七三
三四	親子の情……………	二七四
三五	母北の方帥邸へ……………	二七七
三六	四の君別れの挨拶……………	二七八
三七	女君より四の君母子への便り……………	二七九
三八	母北の方別れの悲しみ……………	二八〇

一九	帥の暇乞い……………	二八〇
二〇	面白の駒の文と筑紫への出立……………	二八一
二一	めでたきことども……………	二八二
二二	めでたきことども——その後の人々……………	二八四
二三	解説……………	二八五
二四	落窪物語系圖……………	二八六

竹
取
物
語

凡 例

竹取物語の本文は決して難解なものではない。註解がなくとも大體理解し得るほど、比較的平易な文章といつてよい。眞の古典鑑賞の道は、直接に本文に親しむに越したことはない。今はその道開きの意味で、「竹取の翁」なり、「かぐや姫」の話は聞いているが、一度もまだ「物語」そのものの内容に接していない人々にも、すぐに全貌がわかるようにと努めた。そしてその中から、なぜ千年以上も前に出たこの作品が、今日にまで傳つたか、國民の古典としての意義をも理解するように考慮したつもりである。

竹取物語の前身には漢文體のようなものがあつたことが豫想されることであるが、たとえば、そうでないにしても、この物語は平安朝のはじめ、漢文調の和文によつて訓練された男性の手になることは間違なからう。漢文調の和文であるだけに、今日から見ても讀み解くのに比較的平易な文體ともいえるのかも知れない。またそれだけに文體が單調で、原文に則した口語譯だけを見ると、どうも文章にうるおいのないといおうか、味がないといえるのである。

本文は、大體、武田祐吉博士の校訂された流布本系統の中での善本「校註竹取物語」によつた。しかし章段の分け方や人名などは、ひろく流布している田中大秀の「竹取翁物語解」によつたし、語句の不明な點も、比較的一般化している解釋に従つた。近頃、古本系統と目される寫本が出現したが（新井信之氏著「竹取物語の研究」）、まだ一般化されて

いない。世間で一般に用いる流布本系統の中で、最も古い部類に入るのは武藤元信氏舊藏がある。これは、江戸時代末、天正二十年の奥書のある本で、最近活字化された（古典文庫本）。しかし、これらでも、まだ本文の問題の箇所は依然として解決されないもので、今は一般に流布している解釋によって置いたのである。解釋も極めて簡単に附して置いた。もしも更に詳細を知ろうと思われる方は拙著「竹取物語詳解」（有精堂刊）を参照願えれば、さいわいである。

一 かぐや姫のおいたち

今では、もう大分昔の話となったが、竹取のお爺さんという者がいた。野や山に分け入って、竹を取っては、それでいろいろなものを細工したりしていた。その名は讃岐の造麻呂さぬきといった。ある日のこと、いつも取る竹の中に、根もとの光る竹が一本あった。變だなあと思つて近くへ寄つて見ると、その筒の中が光っている。更に中をよく見ると、身のたけの三寸ばかりの小さな人が、ほんとうに可愛らしい姿をして入っていた。

竹取の翁は考えた。

「わしが、毎朝毎晩にこうして見廻っている竹の中にいるのだから、當然自分の子になる人じゃ。そなたは*籠じゃあなくて、わしの子になさる人じゃろう」といつて、その子を手の中に大事そうに入れて家へ持つて歸つた。そしてお爺さんはそれをお婆さんに預けて育てさせた。ところがその可愛らしいといったら、何ともいえないほどだった。何分にも大變小さいので賣物の籠かごの中に入れて育てた。

お爺さんは、此の子を見つけてから後というものは、いつものように竹を取りに行くと、竹の節毎に黄金こがねの入っている竹を見つけることが何回となく續いた。そこで、自然、

お爺さんはだんだんと裕福ゆうふくになつて行つた。

この兒は育てて行くうちに、若竹のようにすくすくと大きくなつて行つた。三カ月も経つ間に、背丈が世間並の娘になつたので、大人としての髪を結い上げる儀式の日などとやかくと手配して、髪を結い上げ、裳はかまを著はかせた。お爺さん夫婦はその子を大事にして、御帳ごちやうの中から外へも出さず、可愛がり育てた。その子の顔かたちの人目につくことといつたら、まあ、世間に較べものがなく、この子の美しさで家の中は暗い處もなく、隔々まで光が満ち満ちていた。お爺さんは氣分がすぐれず苦しい時でも、この子を見ると苦しさもやんだ。また腹だたしいことがあつても、この子を見るとやはり心が慰められるのであつた。

お爺さんはそれから後も、黄金の遣入はっている竹を取ることが長いこと續いた。自然に、大層勢力のある長者になつた。一方、その子もいよいよ大きくなつたので、お爺さんは、玉室戸*たまむろの齋部いんべの秋田あきたを呼んで、よい名前を付けさせた。秋田は、その子に「なよ竹のかぐや姫」と言う名を附けた。その名前をつけた三日間というものは、お爺さんは祝いのために宴會を催して、ありとあらゆる歌舞音楽をいろいろやったことだつた。男子は何者をも問わず招き集めて、大酒宴さかものをした。

註

1 子に籠こごをかけた洒落である。

2 髪をあげるのは、男子の元服に相當する女子の成人の祝儀で、十二、三歳頃行ふ。裳えというのは、成人の女の腰から下のうしろの方だけをおおう衣裳で、そのはじめてつけるのを裳著えきの式といい、たいてい髪あげと同時にしる。

3 室内に設けた一段高い所に、周圍に織物を垂らして隔てとしたもの。

4 三室戸は地名、齋部は姓で、祭祀をつかさどる氏族。秋田は名。

二 つ ま ど い

世の男という男は、高貴な者も賤しい者も、何とかしてこのかぐや姫を手に入れたものだ、見たいものだ、その評判を聞いただけで戀慕い、惱んでいた。かぐや姫が住んでいる邸の、つい垣根近くに住む人や、姫の家の近所に住む人でさえ、容易なことでは、姫の姿などは、見るということさえ出来ないのに、それらの男達は、夜はろくろくとは眠らずに、眞暗な闇の夜でも、竹取の翁の家に出かけて行つては、垣根などに穴を開けたり、またあちらこち

らから覗いたりして、想い迷っている。この事があつてから、こうした行爲を、よばいよばい（夜這ひ）と言うようになった。

世間の人が行こうともしないところを、うろつきあるいてみたところで、何の甲斐もありそうに見えない。せめては、姫の家の人達に一言でもいってみようかと言葉をかけてみるけれど、取りあつてもくれない。それでも懲りずに、姫の家の附近を離れずにいる公達きんたが、夜を明し日を暮す者が多い。あきらめのいい人は「無益な忍びあるきはつまらない事だ」といつて來なくなつてしまつた。ところが、そうした中でも、なお諦めきれずに言いよつて來た人で、當時でも、情趣豊かな方と評判の人々だけ五人は、思ひ忘れるどころか、やはり夜となく晝となく通つてくるのであつた。その名前を挙げれば、石作の皇子いしつりのみこ、車持の皇子くるもちのみこ、左大臣阿倍の御主人さだみねのうけしりぬし、大納言大伴の御行おほのくさねのおほとも、中納言石上なかつなごの麻呂まろといった人達であつた。これらの人々は、世間にざらにあるような女でさえも、ちよつとその容貌がいいと聞くと、すぐ見たがるような人達だつたから、かぐや姫を見たがつて、物も食はずに物思ひに耽つて、かぐや姫の家に掛けて行つては、あたりをうろつき廻つたが、何のこともない。手紙を書いて出してもみたが、返事もなく思ひあぐんで、心淋しい歌などを詠んでは送つてみたけれども、やはり返事の歌も來ない。こんな事をして

だめだとは思ふものの、やはり十一月、十二月の雪が降ったり、氷が張ったりする眞冬でも、或いはまた六月の焼きつける暑さや、雷の鳴りはためく眞夏でも、委細かまわずに通いつづけて来たことだった。

この人々、ある時は、竹取の翁を呼び出して、

「お娘さんをわたしに下さい」

と伏しおがんで頼んだり、手をすりもんでおっしゃる。

けれども、翁はただ、

「わし達の産んだ子でないから、思う通りにはならないのでございます」

といって月日を過ごしている。こんなふうだから、この人は、家に歸ってから、思案にくれ、神や佛にお祈りをし、或は願を立て、どうかしてこの娘を思い切ろうとしたのだけれど、やはり思い切れそうもない。いくらお爺さんがあんなことをいったとて、いずれは結婚させずにはおくまいと思ひ、それをあてにしていた。そしてこれでもか、これでもかといわんばかりに、自分の熱心さを、見せつけるかのように、姫の家のあたりを歩き廻った。

この有様を見て、竹取の翁がかぐや姫にいうには、

「わしの大事な大事な姫よ、あなたはもともと、神か佛のお生れ代りだとはいいいながら、こんなに大きくなるまでお育て申したわたし達の氣持も、並大抵では

ありません。この爺の申し上げる事は、きつとお聞き下さるでしょうね」

と念をおすと、かぐや姫は、

「あら、どんな事だつて、おっしゃる事を聞かないことがありましようか。變化の者だなどと少しも知らずに、一途に産みの親とばかり思っておりました」と答える。翁は、

「そういつて頂いて本當にうれしい」

という。更に、

「わしはもう年七十を越えました。今日とも明日ともわからない命です。この世の人というものは、男は女を妻に迎え、女は男と契るものです。そうなつてこそ、一門も廣く榮えるものです。あなただつて、なんで何時まで結婚しなくていられましよう」

かぐや姫が答えるには、

「まあ、どうしてそんな事をするのですの、私は嫌です」というと、翁は、

「いやいや、あなたがいくら、もとは神や佛の御生れ代りではあるとも、やっぱり女の身をお持ち遊ばします。この爺の生きている間は、今のままでいいから、しゃれるでしようが、わしが死んだらどうします。あの方々が長い年月かけて、こんなに熱心に通つて来て